

**グローバル化社会への案内**  
(2006年度文系基礎科目：社会科学の基礎)

佐々木隆生  
北海道大学公共政策大学院教授  
[sasakit@econ.hokudai.ac.jp](mailto:sasakit@econ.hokudai.ac.jp)

第1章 グローバル化社会とは何か

§1. グローバル化 Globalization の展開と「問題」としての認識

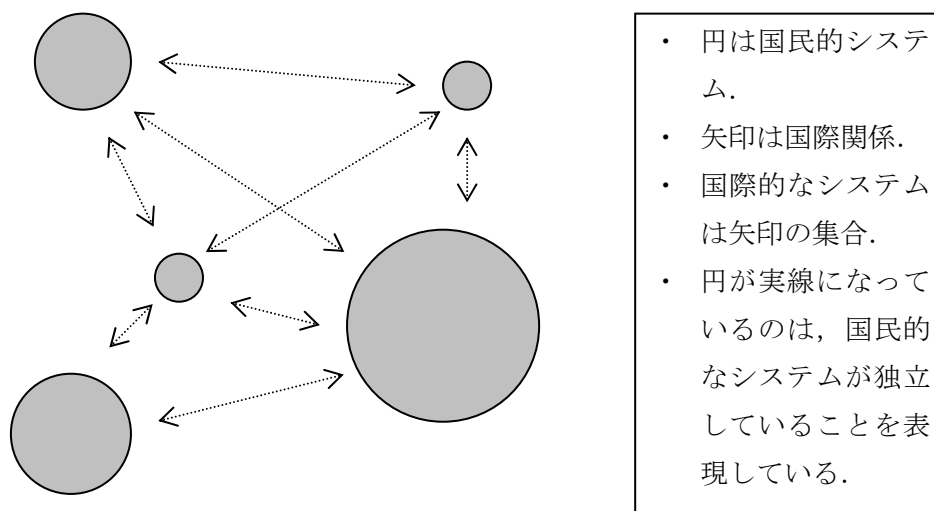
- ・ 「我々は、世界経済において類まれな変化が生じている時に集まった。新たな形態の国際的な相互作用が我々の国民の生活に非常に大きな影響を及ぼしているとともに、我々の経済のグローバル化をもたらしている。」(1994年ナポリ・サミット)
- ・ 「世界経済は、過去50年にわたり、想像を超える変化を遂げてきた。技術の変化が推進してきたグローバル化により、経済は相互依存関係を深めてきた。このことは、従来純粋に国内的なものに見られてきた幾つかの政策分野や政策分野間の相互作用にも当てはまる。我々が直面する主要な課題は、市場の特性を把握し、かつ、重要なプレイヤーが増加していることを認識しながら、この深まりつつある相互依存関係を運営していくことである。」(1995年ハリファックス・サミット)
- ・ 「グローバリゼーション、すなわち世界的なアイデア、資本、技術、財およびサービスの急速かつ加速しつつある流れを伴う複雑なプロセスは、我々の社会に既に大きな変化をもたらした。それは我々をかつてないほどに結び付けた...しかし同時にグローバリゼーションは世界中のある程度の労働者、家庭およびコミュニティにとって混乱および金融面での不確実性のリスク増大を伴ってきた。課題は、グローバリゼーションの影響を制御できないことに対する懸念に応えるために、グローバリゼーションのリスクに対応しつつ、グローバリゼーションが提供する機会を活かすことである。」(1999年ケルン・サミット)

§2. 国際化 internationalization とグローバル化

- ・ 国際化－国民国家 nation-state や国民経済 national economy の独立（自律 autonomy と自立 independence）を前提に、国際関係を補完的のものとして把握する。経済学や政治学は、そのように独立したものとしての国民的システムを伝統的に承認してきた。
- ・ 国際化 internationalization とは、独立した有機体として把握しうる国民国家を枠組みとする社会が閉鎖体系 closed system から開放体系 open system へと、また開放体系の下での国際的相互依存 international interdependency が深化・拡大する

ことを意味していた。

図1. 国際関係の概念図

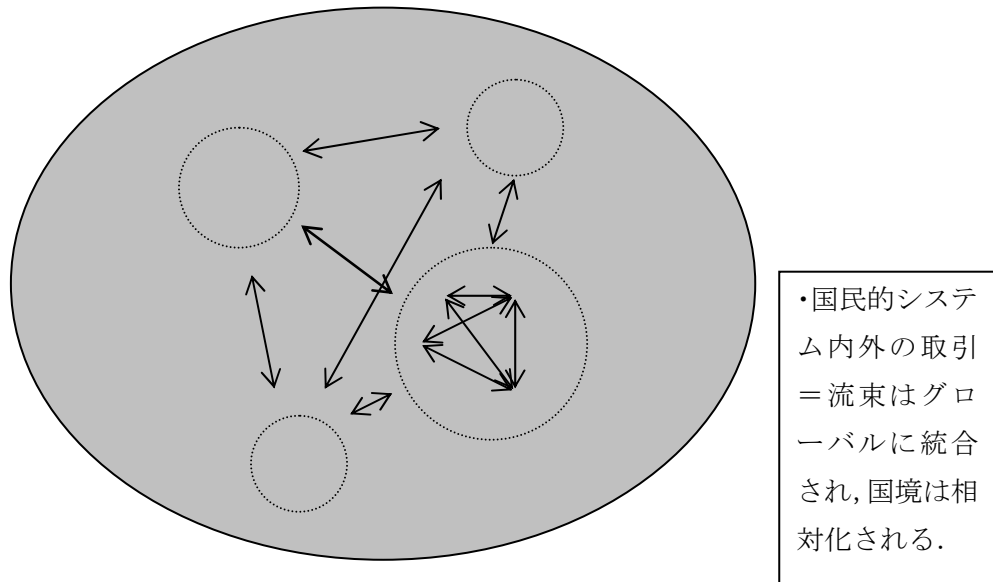


- グローバル化—社会の完結はグローバルなレベルで実現し, そこには国民的システムと国際的システムが内包される. 印象的に言えば図1の円は実線から破線となり(国民的システムの独立性の後退), 円と矢印の集合としてグローバルな社会が自己完結的に存在する.

### §3. グローバル化の実相

- ①輸送・情報通信などのコストの低減(輸送・通信速度と輸送量・情報通信量の拡大)による社会的相互依存関係の増大(international interdependency through removing technical barriers), ②相互依存関係に対する国家的障壁の低減=自由な相互依存の拡大(international interdependency through removing social barriers), ③相互依存関係の領域的拡張
- ⇒④制度・文化・価値の面での近似化・同質化・平準化
- ⇒⑤国民的システムを超えたネットワークやシステムの形成: 多国籍企業 multinational corporation, グローバル・フォーラム, 政策の独立性の困難.

図2. グローバル化社会の概念図



#### §4. グローバル化をもたらしたもの

##### ・ ①技術革新 innovation

○J. A. Schumpeter 『経済発展の理論』岩波文庫

「第一は歴史的状態が不断に変化するという事実であって、歴史的状態はまさにこれによって歴史的時間において歴史的固体となる。これらの変化はたえず反復されるような循環を形成するものでもなければ、また一つの中心をめぐる振子運動でもない。」(p. 163)

「…循環軌道の自発的および非連続的変換ならびに均衡中心点の推移は、産業生活や商業生活の場面に現れる…。生産物および生産方法の変更とは、これらの物や力の結合を変更することである…。新結合が非連続的にのみ現れることができ、また事実そのように現れる限り、発展に特有な現象が成立するのである。」(pp. 181-182)

「この概念は次の五つの場合を含んでいる。1. 新しい財貨…の生産。2. 新しい生産方法。3. 新しい販路の開拓。4. 原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得。5. 新しい組織の実現。」(pp. 182-183)

○技術革新の波 (Carlota Perez, *Technological Revolutions and Financial Capital*, Edward Elger, 2002, p.11)

①1771 産業革命：アークライトの工場（機械制工業）

②1829 蒸気機関と鉄道

③1875 鉄鋼，電気，重工業

④1908 石油，自動車（内燃機関），大量生産

⑤1971 情報通信革命

\* この画期は確定的なものとは言えない。たとえば第2次大戦から始まるジェット・エンジン，ロケット技術，電子技術，原子力利用，石油化学などをもう一段階の画期とする見解などもある。

- ・ ②戦後における国際的文化・学術組織の構築と文化・学術国際交流の展開
- ・ ③社会主義体制の崩壊と一国ケインズ主義の機能不全による自由主義イデオロギーの興隆—ただし，経済的には自由主義的だが政治的には国権的傾向が存在（政治的保守派の特質）
- ・ ④戦後の国際取引自由化（1）第1段階としての IMF=GATT（貿易と為替取引の自由化，しかし資本取引の制限の承認），（2）1980年代から第2段階としての国際資本移動の自由化と貿易を通じる成長への志向増加（WTO の設立）⇒Global Economy の形成

## §5. グローバリゼーションが投げかける問題

- ・ グローバル化は不可逆な歴史的過程の一局面である。
- ・ グローバル化は「完成されたもの」ではない。それは1つの「傾向」である。
- ・ 近代の国民的システムとそれを基盤とした国際社会が大きく変化・変容を蒙りつつある。そのような変化・変容の基本的動因，基本的方向はどのようなものであろうか。
- ・ グローバル化社会は，自由 *liberty*・平和 *peace*・繁栄 *prosperity* をもたらすのであろうか。
- ・ 講義のねらいと留意点
  - ⇒（1）講義は，これらの問題に接近するための基礎的な概念を把握することを主眼として行う。講義から国家，ネーション，市場などについての概念を把握し，それぞれが専門に入ってからそれぞれの専門から現代に接近することが可能となるための準備，また専門の狭さにとらわれずに現代社会と自己の専門をつなげるための準備が可能となることを願っている。
  - （2）基本的な概念が講義では取り上げるが，それを①具体的な歴史的現実との関係で把握すること，②概念をめぐる歴史的な知的財産への視野をもつこ

と、③現代の諸問題にそれらの概念を照らし合わせ、概念の発展や未決の領域への挑戦を試みることで、これらが大学での勉学には必要となる。

- (3) 参考にした文献は読むこと。読書は著者との対話である。著者の此岸に立って理解し、著者の彼岸に立って自らの見解をつくること。読書したからといって知的になれるわけではないが、自分の知的財産の構築は読書なしでは不可能である。
- (4) 進んで読書するものはできれば原書を手にとること。翻訳には誤訳は山のようにあり、原文からでなければ読み取れないことも多い。
- (5) 「質問する」ことの薦め。質問して何か回答があれば、それに対してまた自分で考えるという作業が始まる。それはプラトンの「対話」であり、「弁証」である。読書のそうだが、そのような「対話」・「弁証」を通じて自分の考えを構築するのが学問の基本的手法とも言える。「教えられたことを覚える」のは、学問 study 以前の作業でしかない。「何かこんなことを質問すれば笑われるのではないか」という懸念は捨てること。恥をかき、失敗を山のようにするほどに学問は深く広くなる。「きちんと理解してから質問しよう」というのは学問を遠ざけることでしかない。
- (6) 試験に必要なことは2つ。①知識を丸覚えで書くのではなく、論理的に説明すること（ある命題を述べるだけでなく、なぜそのような命題が導かれるかを論じること）。②教員の考えとは違う考えを書いてもよい。だが、そのときには教員の説明のどこが問題なのかについて述べること（そうしないと「学問」の技法と礼儀を欠く）。